

現代では日本人の2人に1人が一生の中でガンにかかると言われています。油断できないガンですが、ガンの治療方法も進歩しています。今回は新しいガン治療の情報をご紹介します。

新しいガンの治療薬

(1) 分子標的薬の増加

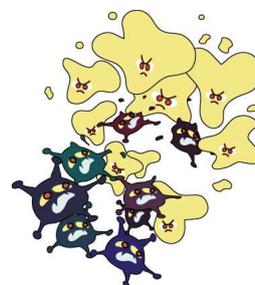
従来の抗ガン剤はガン細胞に対して有効に働きますが、正常な細胞まで損傷しやすいものでした。最近、多く開発されている抗ガン剤に分子標的薬があります。これはガン細胞の増殖機能を阻止する薬剤です。ガン細胞だけに結合して狙い打ちする薬剤(抗体医薬)がその代表です。分子標的薬は、ガン細胞以外の細胞への影響が非常に少なく、従来の抗ガン剤よりも良い効果を示すものが多いため、今後も開発が期待されています。しかし、高価なことや副作用の出ることがあるという課題はあります。

●2008-10年に日本で承認された主な分子標的薬

薬剤名	適応するガン
ソラフェニブ	腎細胞ガン
スニチニブ	腎細胞ガン、消化管間室腫瘍
セツキシマブ	大腸ガン
ニロチニブ	慢性骨髄性白血病
ダサチニブ	慢性骨髄性白血病
ラパチニブ	乳ガン
パニツムマブ	大腸ガン
エベロリスム	腎細胞ガン
テムシロリスム	腎細胞ガン

(2) ガンワクチン

分子標的薬の他に、近年開発が進行している新しいタイプの抗ガン剤に、ガンワクチンがあります。ガンワクチンには次の二つのタイプがあります。①ガンの発生に関与するウイルスに対して効果を発揮する「ウイルス・ワクチン」、②ガン細胞を退治する免疫細胞(キラーT細胞)に攻撃を促す「治療ワクチン」です。①はガン予防の目的で利用され、すでに欧米や日本で用いられるようになった子宮頸ガン予防ワクチン(ヒトパピローマウイルス16型・18型の感染を防ぐワクチン)があります。②については、日本ではまだ開発中のため実用化されていませんが、世界的には脳腫瘍(スイスで承認済み)や前立腺ガン(米国で承認済み)のワクチンがあります。②は患者体内にある免疫細胞の免疫力を活性化・強化してガン細胞を攻撃させるため、分子標的薬同様に正常な細胞を損なうことがなく、より安全な治療ができるものとして期待されています。



放射線治療と外科手術の進化

(1) 放射線治療の進化

従来の放射線治療の欠点は、一方向から放射線を照射するため、照射される側の皮膚に炎症が生じることやガン細胞組織手前にある正常な細胞が放射線によって損傷するリスクがありました。しかし、近年開発されている放射線照射装置の中には、CTなどで立体的にガン組織を特定し、多方向から複数回に分けて放射線を照射する定位放射線照射装置があります。これは一方向のみの放射線照射よりも皮膚や正常な細胞の損傷が少なく、ガン組織に適量の放射線を照射できます。さらに、より高精度な定位放射線治療を目的とした「サイバーナイフ」やガンの形状に合わせて放射線量の強弱を調整できる強度変調放射線治療(IMRT)用の医療機器も開発されています。



(2) ロボット手術

腹腔鏡手術は、腹部に開けた小さな穴から内視鏡や電気メスなどの器具を入れて行う手術で、皮膚を大きく切開しないため、入院期間の短縮や皮膚に残る治療の跡も小さくなるメリットがあります。さらに、現在では「ダヴィンチ」という医療用ロボットで行う腹腔鏡手術が一部の病院で始められました。患者の腹部に内視鏡、電気メスや鉗子(かんし=手術中に患者の組織をつかむために用いるハサミのような形をした器具)を取り付けたロボットアームを差し入れ、医師がモニター映像を見ながらロボットアームを操作する手術法です。医師が見るモニターの映像は拡大可能な立体画像であり、肉眼で見るとよりも鮮明だということです。手術用の鉗子やメスの扱いについても、人の手による手術より自由が効き、操作性が良いという特徴があります。そのため前立腺ガンなど従来の腹腔鏡手術では難しい複雑な部位の手術では、従来の外科手術より安全・正確な手術が可能となります。残念ながら「ダヴィンチ」による手術は保険適用にまでは至っていませんが、一部の病院では先進医療の認可を受けています。

《皆様の安心と安全のブレイントラスト(専門顧問グループ)》

株式会社ヤシロエージェンシーリミテッド 担当: 八城一浩

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-1-2 TEL: 03-3582-4511